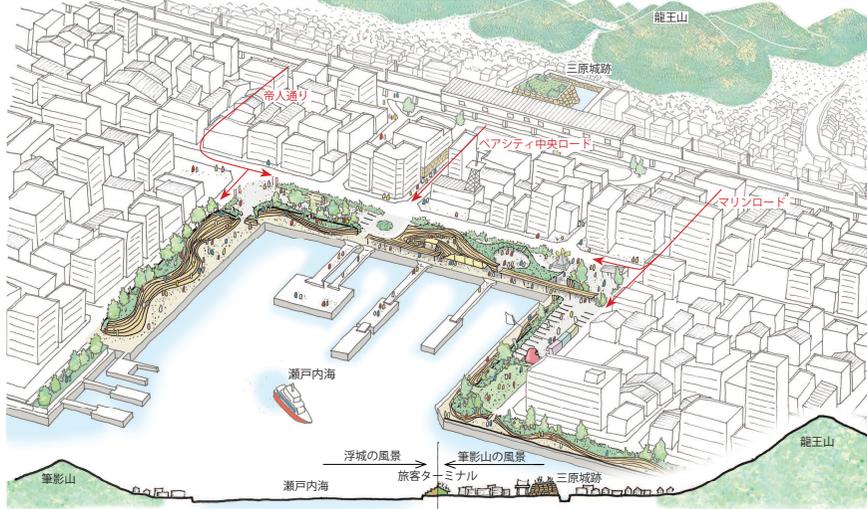
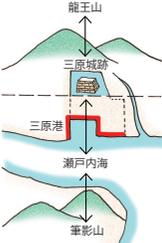


テーマ①:にきわいつくりに奇しき港が感じられる景観を形成する施設づくり
旧城下町、三原が持つ龍王山から筆影山へとつづく景観構造を読み取り、それらのつながりを強化する港の拠点

北の龍王山から、三原城下街、そして瀬戸内海から筆影山に至る、この約500年間変わらない三原城下の雄大な都市景観の構造を強化するための港のあり方を提案します。それは、海からはかつての浮城を思わせる地元の石を生かした屋外劇場が三原城とつながり、かつての浮城の風景を未来につなげます。街からは、古来から人々が望んでいた瀬戸内海に浮かぶ筆影山の基部となるような風景を生み出し、この風景の二面性によって雄大な三原の景観構造を強化し、未来につなげます。また、街の南北軸となる3つの通りを港に接続しながら、旅客ターミナルを中心として街側のグリーンベルトと港側の石の劇場を港一帯に展開し、水際全体での賑わいを生み出します。

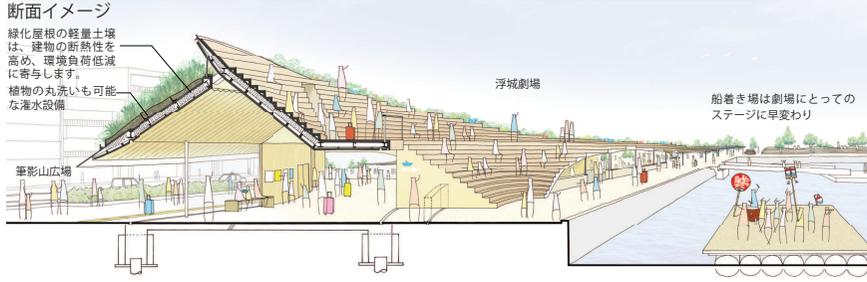


筆影山の風景を未来につなぐ



街側から海を見ると、古来から見ている筆影山の風景の基部となるように、旅客ターミナルの屋根を中心とする緑の丘が立ち上がり、街と海、そして筆影山が呼応しつながり、三原ならではの雄大な都市景観を強化します。

筆影山広場の風景とつらなる緑の丘で、涼しい旅客ターミナルの庇下空間を核に、街側の歩道を広場に繋ぎ、街の4大祭りや日常のマーケットとしての憩いの居場所とすることで、街から港へと人々を迎え入れ、街と海を物理的につなぎます。



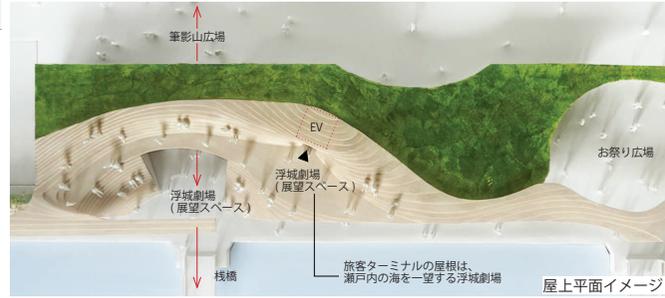
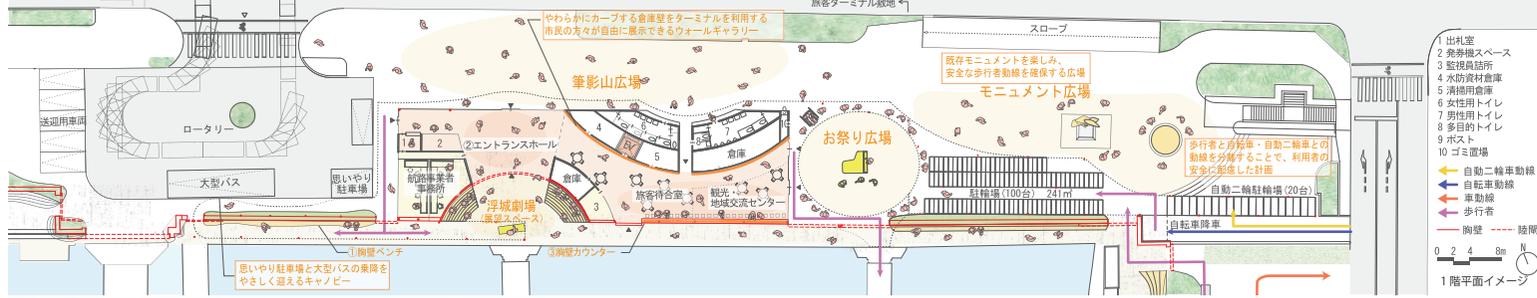
筆影山広場と浮城劇場を新たな旅客ターミナルによって結びつけることにより、風景としても居場所としても街から海までを力強くむすびつけ、三原ならではの景観構造と、港の賑わいを実現します。

浮城劇場



港の中心として、旅客ターミナルそのものが海際から登ることのできる海に開かれた立体的な屋外劇場となり、海の舞台をかこむ客席として、また日常の瀬戸内の生活や風景をみながら見守ることのできる居場所として街と海を結びつける浮城の港町ならではの親水空間とします。

テーマ②: 港を訪れた誰もが港内の回遊ができて快適に安心して過ごせる施設づくり
内外一体となって街と海をむすびつける賑わいの核となる旅客ターミナル



① 連絡通路に伸びる既存胸壁は船をまち、海を望む胸壁ベンチとすることでみんなど海を見守る屋外劇場の一部となります。

② 旅客ターミナルの内部空間は、屋外に広がる展望スペースと一体的に活用可能な空間であり、街と海をつなぐ広場のような空間です。

③ 旅客ターミナル内における胸壁は、海を望む胸壁カウンターとしても機能し、しっかりと人々を守りながら海を楽しめる設えとしての働きを持たせます。

旅客ターミナルの内部空間は、外部のお祭り広場と一体的な利用が可能で、内外にまたがるマーケット・ステージをかこむイベントなど多彩な利用を可能にします。